

伝統行事の伝承に関する一考察

一遠野市「みずき雛」協働作業を通じて一

遠藤 雅子
(総合福祉学科)

要 約

本稿では、岩手県遠野市に伝わる「雛見」の風習が「遠野町家のひなまつり」として復活し、その準備にかかわる女性たちの協働作業を通して、地域振興に寄与する女性たちの実態を調査した。観光イベントの一環で「みずき雛」を飾りつける協働作業は、伝統行事の伝承手段であり、異世代間のコミュニケーションの場でもある。加えて地域の人々のアイデンティティ醸成の場でもあるのではないかと考え、作業を参与観察した。コロナ禍以降、県外からの観光客が減少したなかで伝統行事に携わる女性たちは、祭りの役割を遂行することで地域経済の循環に寄与し、移住者も含め地域の人々が生活の場としてこの町を意識するきっかけにもなり得ることが明らかになった。

キーワード：伝統行事，雛祭り，役割，地域振興

(2022.9.7 受稿 査読審査を経て 2022.11.22 受理)

1. はじめに

少子化による労働力不足は、地方都市においては深刻である。進学のため大都市に流出した若者が地元に戻ることなく過疎化が進み、事業継承が難しい事業所や商店街は全国いたるところにある。人口を維持し、経済力や人々の意欲・活力を向上させるためには住民の主體的な取組みが欠かせない。地域に根ざした暮らしの文化を次代につなげ、観光資源としても活用してゆくことで地域が活性化されてゆく可能性は高い。

地域活性化の成功事例の多くは、若者や外部からの参入者が、地元の人々と協働して新しい価値を創り出すことで、地域力の衰退に歯止めをかけたように紹介されることが多い。一方、地域に根ざした中高年の女性たちも地域振興の担い手である。町の活性化、観光振興に寄与する可能性は高く、その取組みは観光資料や商工会の取組として紹介されてはいるものの、研究は事例検討の余地があるといつてよいだろう。

本稿では岩手県遠野市に古くから伝わる「町家のひなまつり」を支える商工会女性部の活動に着目し、雛めぐりがいかに地域の活性化につながっているかを考察するとともに、協働作業が伝統文化を育むコミュニティの構築に繋がる可能性について検討した。

2. 先行研究

2-1 雛祭りの起源

なぜ桃の節句に雛人形を飾るのか。その起源は神事と結びついている^[注1]。中国では三月の上巳の日^[注2]に水辺に集まり、禊ぎをしていた。その文化が平安時代に日本に伝わり、上巳の日には紙でつくった「人形（ひとがた）」で体をなでて身のけがれを移し、水に流して厄払いをしたという。『源氏物語』須磨の巻に、陰陽師を招いて海辺で上巳の祓を行うという記述がある。また、若紫の巻、末摘花の巻等には雛の古語である「ひいな」も登場する。川に流して厄落としをする形式は、今も鳥取県等の「流し雛」行事に受け継がれている。

やがて室町時代には紙ひいな、立ち雛に、江戸時代には安定のよい座り雛へと形を変え、流すものから飾るものへと変化した^[注3]。江戸時代中期以降、雛人形は一般家庭でも広く親しまれるようになり、雛売りたちは需要の増加につれて一定期間に許された場所で商いをする「雛市」が生まれた^[注4]。元禄時代には、公家・武家から庶民にまで雛人形、雛祭りが流行し、段飾りは三段から五段、七段と、次第に華美になっていった。初期の雛祭りでは女兒誕生とは直接関係がなく、江戸中期頃から女兒の初節句を祝うものになったという。高価な雛人形には手が届かなかった地方の人々は、暮らしのなかで端

切れや藁など様々な素材を用いて郷土雛をつくった。

2-2 観光資源としての雛祭り事例

柳川（福岡県）のさげもん、東伊豆（静岡県）のつるし飾り、庄内（山形県）の旧家や須坂（長野県）の豪商の雛人形および雛の膳、日田（大分県）の山里の雛祭りなど、各地で雛人形を町に飾る風習がみられる。

今や全国各地で雛祭りは観光化し、その地に伝わる雛人形が町のいたるところに飾られ、内外の人々が眺め歩く取組みは少なくない。例えば、徳島県勝浦町の事例を通して、山田〔2015〕は、地域固有の特徴ある民俗文化ではないごく一般的な民俗が、その地域を特徴づけるイベントとして成功し、地域おこしを果たしてゆく過程とその要因について分析した〔注5〕。この取組みは1988年に始まり現在も続いている。当初役場の職員を中心に企画され、対象は主に町民であった。地域に固有の雛人形を前面に出したわけではなく、各家庭で収蔵されていた雛人形を集め、巨大な雛段に飾ることでイベントの特性を形成していった。創作的な飾り方を導入することで、町内外の観覧者を集めることに成功した。その後、活性化を図るために民間団体をつくり、事業は引き継がれた。団体が法人化され、メンバーの公務員は活動が自由にやりやすくなった。さらに専用の建物を所有することが可能になり、人形文化交流館ができた。この交流館で行う「雛供養」は全国から寄贈された人形すべてに対して行われ、その年に初節句を迎える女兒を招いて、巨大な雛段の前での撮影会も継続している。他県とのネットワークも形成され、各地に祭りのノウハウを提供し、イベント情報の交換、交流を頻繁に行っている。

都市化の波から取り残された地域で、自地域の資源を活用した観光誘致がいかにかに展開されてきたかという個別地域内の研究から視野を広げ、古河〔2018〕は実施地域間の関係に着目した。全国的に活用されている観光素材として観光ひな祭りを取り上げ、地域同士の情報伝播や、広域的な関係が全国的展開をもたらした過程と、全国的展開へ向かう動きが収束した後における広域的な関係に焦点をあてた。他地域から「雛人形を町に飾る」というアイデアを取り入れ、開催過程は自地域で、手探りで行う。また、先進地域からイベントや組織運営に関して助言を得たうえで観光ひな祭りを始める。このような形式伝播、開催手法の伝承に加え、送り手による働きかけが、観光ひな祭りの全国展開に大きな役割を果たしていると指摘する。九州の広域振興協議会の例や、徳島県勝浦町などを事例に取り上げ、観光ひな祭りを実施する各地域は、

他地域を競合相手とは捉えておらず、雛祭りサミットを開く等の手段を通じて、広域的な情報交換を行い、自らの独自性を出そうとしているという。しかし、観光客のルートに即して連携する動きは見られず、同時期に行われる利点を生かし切れていないことを明らかにした〔注6〕。

また、池田・淡野〔2020〕は、愛媛県鬼北町における座敷雛の展示行事が、いかにして他地域から伝播し、住民有志によって継承されてきたか、地域文化としての座敷雛の特徴や役割を明らかにした〔注7〕。多くの雛祭りが雛人形そのものの展示を重視する傾向にあるなかで、鬼北町の座敷雛は人形の周囲に造詣を設ける特徴を、池田・淡野は指摘した。八幡浜市真穴地区が発祥の地とされるが、1930年代の鬼北町では座敷雛を実施した家が数戸存在したという。八幡浜市真穴町と鬼北町旧広見町の住民との間での婚姻関係の成立により座敷雛は伝播した。座敷雛の製作は、第二次世界大戦の影響によって生活そのものが圧迫され、戦後まもなく中止されたという。鬼北町において座敷雛が復活したのは、有志3名が保存会を立ち上げた1994年のことである。最初の座敷雛展示は商店が管理する建物の一角を用いて実施された。その後メンバーが増え、展示は店舗内で実施されるようになり、ちんどん屋を招くなどして町内での認知は高まっていった。

2-3 家族役割・日本の嫁姑事情

日本の嫁姑事情について見てみると、両者の間に圧政と反抗との衝突を見るのは避け難い悲惨な事実〔注8〕であるという記述に類似するものは少なくない。嫁と姑の人間関係の煩わしさは日本に限ったものではなく欧米にもあるが、欧米は別居という形で問題を解決している。日本では二つの異なった世代の女性が苦しみつつ、悩みつつ、次第に根をからませるように両立してゆく道をさぐりあてている〔注9〕という指摘もある。川島武宣〔1961〕は、婚家と嫁の関係はどのように家族制度的な関係なのかを社会学的に考察した。一つは他人である嫁が労働による支払いという形で婚家の家族となる地位を得るといった経済的側面がある。第二の要素は、封建的な家族制度で成り立つ家族集団（家）が他家から来た異分子（ヨソ者）である娘を受け入れて収容する「家」と「家」との社会的相互作用から生ずるところの人間的側面である。婚家と嫁との関係は家系を継承する跡取り（相続人）を生む人として迎え入れられるという関係であることも見逃せない。跡取りを生むことに加え、第三に「家風」を継ぐものとしての嫁は期待されてきた〔注10〕。

日本の伝統的家族について地域差を指摘した先行研究^[注11]では、東北型家族と西南型家族の二つに大別されている。東北型は直系家族による三世同居という家族構成で、相続・継承に関しては長子継承の特徴がある。家長権の譲渡に関しては死譲り、無隠居制とされ、婚姻は仲人婚、嫁入り婚、村外婚などの特徴が注目される。これらは武家社会において発達したものと考えられている。このような東北日本型家族はごく最近まで東北・北陸地方に限らず全国各地に分布していた。さらに工藤豪 [2013] は、社会学、民俗学、社会人類学において展開されてきた研究を踏まえて、隠居制家族の位置づけについて考察し、家族構造のとらえ方について新たな指標を提示した^[注12]。

田中真砂子ら [1994] は、結婚により婚家に入る女性の、夫家における地位や役割、生家との関わりや婚入した女性を通しての二つの家（集団）のあり方などを歴史的・地域的に検討した^[注13]。この中で田中 亘は韓国家族における「主婦権」の内容について4点ほど指摘している。①財産権、②家督権、③代表権、④祭祀権である。家の経済では、大きな財布は家長が、小さな財布は主婦が握り、家計の切り回しは両者が協力して当たる^[注14]。嫁は姑の指示・監督のもと衣食住に関する実務にあたるというが、役割のありようは日本の伝統的家族と似ているといえよう。また、同書のなかで岩上真珠は、これまでの「家」の構造分析は家長を中心としたものが大勢を占めていたことから、「家」の内部動態をより明確にし、成員カテゴリーをなす婚入者の分析をもっと進める必要があると指摘した^[注15]。

2-4 祭りにおける女性の役割

小泉麻美は佐渡市岩首の鬼太鼓を事例に取り上げ^[注16]祭礼における男女の役割分担が、近年どのように変化してきたかを明らかにした。鬼太鼓の詳しい起源は分かっておらず、江戸時代以前の文献はない。鬼太鼓を主として取り仕切っているのは高校生から60歳までの集落内の男性によって構成される岩首余興部である。過疎化が進み、1980年代からは鼓童の研修生が民俗芸能として鬼太鼓を学ぶようになった。さらに近年は、女性も鬼太鼓を打つ稽古をするようになった。研修生のなかに女性も含まれていたからだ。女性の存在は寄合でも問題になったが、研修の一環として鬼太鼓を稽古することで許可された。集落内の女性に関わるのは獅子や鬼の衣装を整える仕事で、余興部から声のかかった女性が行う。大祭が行われるときには明確な性別役割が存在する。女性

が家で客をもてなし大祭を見守る仕事は、大きな役割であり、大祭から女性を排除しているものではないという。祭礼では集落外の人間の参加を受け入れているが、そこには時間的、空間的に明確な境界線が設けられている。また、近年祭礼に参加するようになった女性たちは外部からの「異人」とみなされている。「異人」には性別がないから鬼太鼓に参加できる。それでも今後、芸能の後継者が減った場合には、性別役割が見直される可能性があるという。

雛祭りに関しては前述のとおり各地で様々な取組がなされている。中でも坂元らが「柳川のさげもん」を対象に行った調査^[注17]は注目に値するだろう。地元女性による雛飾りや手芸活動（さげもん作り）は、本来の生活習俗の文脈から切り離され、観光客用の土産品や趣味活動の対象、生涯学習の教材などにその用途を拡大しつつあることが明らかになった。中高年女性を中心に構成されるさげもん作りの場は、子育てや職業生活を終えた女性たちの、第二の人生の再構築の場であるという点が興味深い。地域を挙げての観光の「仕掛け」を背景に、実践共同体が地域の伝統行事の伝承過程を動かしているという。少子化を背景に、祭りに関する事例研究は性別役割の見直しや、新たな女性の役割が評価される実態が明らかになってゆくものと期待できる。次章では、東北地方の雛祭りを、観光資源という視点から伝承してゆく女性たちの取組みを紹介する。

3. 遠野町家のひなまつり

3-1 岩手県遠野市について

遠野市は岩手県の内陸部に位置し、柳田国男の『遠野物語』でその名を知られるとおり、民話の里である。2022年2月現在の人口は、25,481人（女性：13,147人／男性：12,334人）で男女ともに減少傾向にある。世帯数は10,671世帯、高齢化率は41.0%である。

2005年に旧遠野市と旧宮守村が合併したことにより、市域は825.62㎏となった。市域面積の80.9%を山林が占め、9町から成る遠野市の基幹産業は農林業である。北東部に位置する荒川高原牧場と、東部に位置する土淵山口集落は、「遠野 荒川高原牧場 土淵山口集落」として国の重要文化的景観に選定されている。『遠野物語』に代表される、自然・信仰・風習に関連する独特の文化的景観が広がっている。さらに「千葉家住宅」等、多くの歴史的建造物が、日本の原風景のある地として観光スポットの一つとなっている。早池峰国定公園内にある早池峰

山や薬師岳は、内外を問わず訪れる人々を魅了する観光地である。

3-2 遠野町家のひなまつり

遠野では昔から「おひなさま、お見せておぐれんせ」と家々を巡る風習がある。その風習のように街中を巡りながら、様々なお雛様を見てまわってもらおうという地域おこし行事は2022年で23年目を迎えた。

遠野遺産公式ガイドブック『遠野遺産第28号』では、「お店、個人宅でお雛様を飾り遊覧客に対して雛の由来などを話し、甘酒や菓子でもてなす習慣が、記録では大正2年にはすでに行われていた。交通の要衝として商家が栄え、このような習慣が生まれたと考えられる。写真でご紹介している雛飾りは遠野ショッピングセンターとびあで展示されている白岩家と小竹家のものです。期間中は隣接した休憩所脇で語り部による昔話を聞くことができます。」と紹介されている。

上開伊新報 大正2(1913)年4月5日版によると、「陰暦三月一日は雛市と称して露店に多くの雛を列ね弓矢などをもひさぐ。村々の人幼童子女相伴ひて之を購ふ。市中の賑わひ平日に数倍し雛には多くの種類あり。中に就き京人形の移入もありつれども上地産の附馬牛製若くは花巻製など半ばを過ぎ今は此等地産雛漸く衰へぬれと廉価なるまゝ花巻製の呼び聲尚聞ゆされば京雛の骨董店などに出づることあれば競ひ争ひて之を購ひ其価格遥に新製品の上に出づることあり。」とある。旧暦3月1日には雛市が立ち、家々では奥の間に雛段を構え、上段に内裏雛を、次段に左右大臣と三人官女、五人囃子、その他種々の雛を並列し、下段に諸道具を飾った。錦絵も飾ったとある。2日には雛に供える菓子を作り、近親懇家に配るなど大忙しだったようだ。3日になると着飾って近隣の家々を回り、「雛見」したと記されている。餡餅、蓬餅、果物、甘酒などが振る舞われ、大人は山海の珍味に舌鼓したようだ。

3-3 商工会女性部について

商工会は、商工会法に基づいて、主に町村部に設立された公的団体である。地域の事業者が業種に関わりなく会員となつて、お互いの事業の発展や地域の発展のために総合的な活動を行っている。2022年3月現在、全国に1,649の商工会がある^[注18]。商工会女性部は年齢に関係なく、商工業者およびその配偶者、または親族である女性で組織されている。その役割は、「経営者あるいは共同経営者として経営に関する知識や技術の習得の他、女性としての教養を身につけ、地域社会の発展にも貢献し

ようというもの」であり、地域振興発展の推進役、組織活性化の原動力であり、福祉の増進・豊かなまちづくりの担い手でもある。女性部の上部団体が、全国商工会女性部連合会であり、おもてなし交流事業、女性の創業等支援助成金事業などを活動の柱とし、過去には子育て支援事業やふるさと小包事業、現在は災害対策100円積立基金事業にも取り組んでいる。

おもてなし交流事業は、「その地で商売をし、生活している女性部員だからこそ知っている、地域の隠れた魅力(食・名所・自然・景観・施設・産業・伝統・文化などの“いいところ”や“いいもの”)を取り入れた着地型旅行や体験型観光の「おもてなしプラン」を募集して、女性部の視察研修や親睦旅行の際に利用できるようにWEB上で情報を公開している。

雛人形を見て回る風習があったので、商工会女性部から「町のなかに雛人形をディスプレイして、見て回れるようにしよう」という意見が出たのは自然の流れだった。市内外から訪れる人たちに町の中を巡らせることで、地元文化を伝えることができると「おもてなしプラン」は評価された。2018年2月23日から3月4日の間に行われた、遠野町家のひなまつりめぐり「見でっておぐれんせ」の内容は、「古びな、物語びな、みずきびな・・・城下町遠野の町家では、古くからおひなさまが大切にされて、現在に数多く伝えられています。期間中は町内25店舗の古雛、特別公開・23店舗のおひなさまギャラリー、イベントの開催・16店舗によるお食事お休み処では、この期間限定のひな弁当・お菓子が楽しめます。期間最終日3月3日、一年の穢れをひと形(紙人形)に託し、無病息災やこれからの幸せを祈るこの習わしを遠野町家のひなまつりのイベントフィナーレとして開催いたします。」とある。おもてなしポイントは、「小正月にみずき団子を飾り付けるみずきの枝に、ひなまつり参加者手作りの雛を飾り、遠野独自の先祖供養や祈り願いを込めたみずき雛が各会場に工夫を凝らし飾られます。」であった。

みずき団子とは、みずきの枝に食紅などで色付けをした団子を飾り、五穀豊穡を祈る小正月行事の一つである。吊るし雛は、衣食住に困らないようにとの願いを込めて飾られるものであり、細工物として作られる対象は動物や花、衣服、遊び道具などさまざまで、それぞれに異なる意味や云われがある。図1～3は遠野駅舎に婦人部が飾り付けしたみずき雛である(筆者撮影)。



図1 みずき雛の由来



図2 みずき雛全体像



図3 細工物

4. アイデンティティの醸成

4-1 作業の流れ

令和4年度の遠野商工会女性部活動を2022年2月に参与観察した。東日本大震災で全壊した市役所本庁舎は、2017年9月に開庁し、以来、婦人部が庁舎入り口に「みずき雛」を飾るようになった。作業当日は、朝9時に集合して袋詰めの作業を行った後、10時に本庁舎にて飾り付けを開始した。

先ず3人が衝立を用意し、みずきの枝に飾り雛をぶる下げていった。6人が袋に入った飾りを準備し、2人がワイヤーを張る作業を市役所職員とともに行った。紐でつながった飾り雛を竹に通し、のれんのように下げる。糸が絡まないように丁寧に作業するため、時間はかかる。枝を正面にぶる下げる作業は、飾りの間隔や重さのバランスを見ながら、透明テープやワイヤーで止めてゆく。その後も次々と女性部員が現れ、皆でアイデアを出し合いながら、総勢十数名で作業を進めた。図4～8は、その作業工程である（筆者撮影）。



図4 遠野市役所本庁舎外観

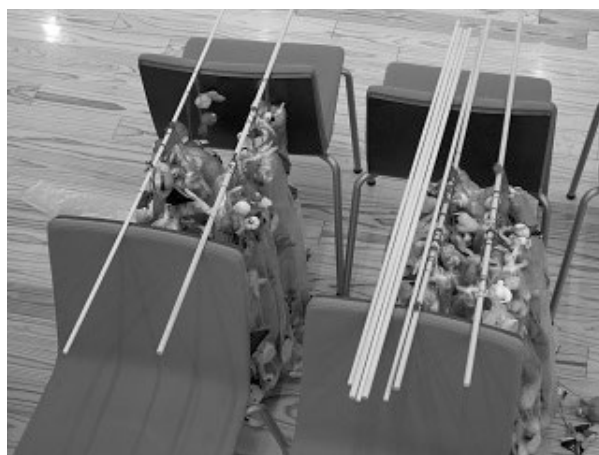


図5 作業工程



図6 作業工程



図7 作業工程



図8 作業工程

みずきは遠野地方森林組合に発注した。森林組合は、間伐・作業道づくり・造林等に取り組んでいる。貯木場と市場機能を兼ね備えた木材流通センターでは、山から集められた丸太を厳選し、製材所に出荷する。販売収益や造林補助制度を用いて伐採跡地に苗木を植栽し、「植える→育てる→使う→植える」という“森林資源の循環利用”を推進している。婦人部も遠野のみずきを活用し、雛人形を見に来た人たちにみずきの説明をすることで、地産地消に一役買っている。

このみずき雛は市外から婚入した女性からの寄贈で、その数は1,000個にもものぼる。この女性は前述の「町家のひなまつりめぐり」参加に際して、古い雛人形を持っていなかった。初めは参加してよいものか、躊躇したという。そこで150年ほど前の慶応後期頃の刺し子の火消し半纏や手袋と、娘が生まれたときに購入した雛人形を展示した。その後、つるし飾りの名所静岡県の稲取に行った人の、「みずきの木につるし雛を飾って、『みずきびな』というのを遠野で作って見ないか」という提案に興味を持ち、人形を作り始めた。みずきの木を鮮やかに彩る人形のなかでも河童は遠野ならではのものであり、観光で訪れた人々に興味を持ってもらえたという。その他、附馬牛（つきもうし）人形や地域の人が作った雛飾りを店内に飾り、おもてなしに取り組んだ。附馬牛人形とは、遠野市附馬牛町で江戸時代の終わり頃から大正時代にかけて、花巻人形の影響を受けて製作された人形である。その後一時製作は途絶えたが、1985年に復活した。土に和紙を混ぜて型取りし、焼かずに乾燥させて彩色する。目の周りに淡い赤を用いた手法や、細かい線で描かれた繊細な表情には深い味わいがある。その女性が亡くなった際に遺族から、「ばらばらにしないで飾ってほしい」と婦人部に寄贈され、見ごたえのある飾り付けに至った。

みずき雛の飾りつけが終りかけた頃、途中で数名が雛人形を商工会まで取りに行き、後半はひな壇の飾りつけが始まった。各家庭に代々伝わる雛人形や、桃の節句を引き立てる人形が、手製の雛壇に飾られていった。毛氈の代わりに着物や帯を用いるなど工夫が随所に見られた。図9（筆者撮影）左手には帯が数本掛けられ、彩りを増している。市役所に集合してから全ての作業が完了するまでに2時間強の時間を要した。



図9 手作りの雛壇飾り

4-2 考察

毎年繰り返される行事に、その都度工夫を重ねてきたことで、分担作業は手慣れたものだった。今回参加した女性部員たちの年齢は40代以降が大半であった。雛人形の保管だけでも大仕事である。橘や菱餅など、雛壇に飾る小物が多数あるということは、それだけ伝統行事に関する知識を要するという点でもである。実際、飾り付けをしている間に何をどの位置に置くか、一瞬戸惑い、確認し合う様子が見てとれた。古い土人形はその謂れを伝え合う場面もあった。伝統文化は主婦権の移譲とともに受け継がれるだけでなく、家と家を越えて、伝承されてゆく。

雛人形を飾りつけしても、全ての店舗の売上につながるとは限らない。業種によっては、「町家のひなまつりめぐり」に参加しても経済的な効果を得にくい店もある。それでも女性部の活動がマスコミに取り上げられ、社会的に評価されることで達成感を味わうことが出来れば、商工会への帰属意識や地域を盛り上げていこうというモチベーションは高まるといえよう。共通の想いをもって共に作業することで、共同体の一員であるという意識が芽生えてゆくことは否定できない。初めから実体があるのではなく、みずき雛の飾りつけを実践することで共同体は構成されてゆく。活動に参加することで、市外から転入してきた者も、自他ともに認める地域の構成員となる。

遠野市も他の地方都市と同様に、若者は都市部に流出しているものの、毎年夫の転勤に随行してくる女性たち、Uターン、Iターン組も一定数見受けられる。そのような転入者を迎え入れ、活動している諸グループのメンバーは、三分の二が地元の女性だという。一方、嫁には嫁のつながりもある。作業中の女性にヒアリングしたところ、「女性には生活感があって折り合いをつけるのが上手な人が多い。」「執着を手放すことでつながり直すことができる。」「男性の方が職務や権限にこだわる人が多いのではない。組織のテリトリーを脅かすことを怖れるので、女性のように“つるむ”ことが少ない。」などの声を耳にした。この“折り合いをつける”には、店の売上を他家と比較した際に生じるであろう様々な想いや感情が昇華されてゆく様子が感じられた。コロナ禍で観光客が町を巡ることは期待できないため、今年は一軒ずつアンケート調査を行い、「ひなまつりめぐり」への参加意思を確認したという。参加辞退、反対意見は少なかった。主婦権の移譲の際には、実践の文化も継承されてゆく。

5. おわりに

市職員の話では、主婦権の移譲がなされた嫁にとって最大の仕事は葬式だという。葬儀のまかないを「下まわり」といって、お悔み客に食事の膳を勧める習わしがある。汁物、煮しめ、三品盛り、漬物をのせた膳を多いときは200~300人分作らなくてはならない。台所で下まわりに来た女衆から故人の若かりし頃の話聞くこともある。葬式は女性が地域で一人前として扱われる機会でもあるため、“女の学校”ともいわれる。通常は下まわりの経験を積み重ねた後に、姑から親戚や地域に主婦としてお披露目がなされる。しかし、姑から諸々のつきあいに関して習う前に他界されてしまうと、ロールモデルがいらないなかで“主婦デビュー”をしなくてはならない。地域のつきあいには必ず決断が迫られる。例えば冠婚葬祭で買ってよいもの、現金ならいくら包むか、食事のメニューはどうするか等、主婦に決定権がある。主婦が決定しなくてはならない。遠野では「主婦の力」がないと生活が成り立たない。コロナ禍で葬儀を取り仕切ることが出来ないと、伝統的な料理を伝授する機会も逸してしまう。祭りでは、主婦が女子神楽の舞い手に戻ることもあるという。

遠野には多数の祭りがある。郷土史^[注19]によると、現在65の芸能団体が活動している。神楽が最も多く21団体、次いで獅子踊りが16団体、南部囃子が7団体、太神楽とさんさ踊りが5団体とそれに続く。中断中のものを含めると全体で120団体がかつて存在していた記録が残っている。2009年に行われた岩手県民俗芸能伝承調査では、神楽が最も多く3割超を占め、獅子踊り、田植え踊り、南部囃子、さんさ踊りと続く。遠野市で上位を占める団体は岩手県全体と共通しているが、南部囃子の多いのが特徴的である。遠野市の郷土芸能の多くは大正から昭和初期にかけて最も盛んな時期を迎えた。人々の生活はいつも豊かなわけではなかったが、それでも祭りのために晴れの衣装を購入し、祭りを祝った。さまざまな郷土芸能は、神への祈りや感謝として、また、娯楽の一つとして長い間伝承されてきた。昭和40年代後半になると人手不足や若者の芸能に対する意識の変化が顕在化した。平成以降、保存会同士の協議会組織が結成され、演目の復活や自治会・保存会が協力して芸能の復活に取り組む地域も現れてきている。筆者が2019年に遠野祭りを取材した時点で、男児に混じって女兒が踊る団体があった。山伏神楽は修験者の手で伝承され、舞い手は長男であったが、10年ほど前から舞い手に女性を入れるようになって

伝統行事の伝承に関する一考察

た地域もあるという。

遠野でも祭りにおける性別役割は明確だったが、実体として少子化に抗えない現実がある。節句行事も祭りも年中行事に変わりはないが、性別役割が歴然としていた祭祀に比べて、雛祭りは女性にとって特別なものだったのかもしれない。本稿では、町をあげての雛祭り行事の準備にかかわる女性たちの協働作業を通して、女性たちがいかに地域振興に寄与しているか、伝統行事の伝承につながっているか、遠野の主婦としての意識を醸成しているかを考察した。コロナ禍で観光行事としての祭りは開催を見合わせ、経済が大きく動く機会を逸している。冠婚葬祭もまた、影響を受けている。今回は、葬祭における主婦の役割を踏まえて、遠野の年中行事の伝承について見てきたが、各地域の祭祀については調査が不十分である。先行研究にならない、祭祀における役割がいかに変容しつつあるか調査することを今後の課題としたい。

謝辞：

本研究を進めるにあたり調査ならびに資料提供にご協力くださいました関係各位に、心より御礼申し上げます。

注・引用文献：

1. 『雛祭り雛めぐり』文化出版局,2003, 84-85 頁
2. 旧暦 3 月の最初の巳の日こと。中国にはこの日は水辺で身体を清め、宴会を催し、災厄を祓うという風習があった。古代中国にはじまる暦法では十干と十二支を組み合わせた 60 を周期とし、十二支を 12 日ごとに割り当てて、「巳」に当たる日のことを巳の日という。
3. 前掲 2, 84 頁
4. 前掲 2, 52 頁
5. 山田慎也「地域おこしとしての雛祭り 徳島県勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して」『国立歴史民俗博物館研究報告 第 193 集』,国立歴史民俗博物館,2015
6. 古河佳子「地域振興の全国的展開と開催地間の連携：観光ひな祭りを事例として」『日本地理学会発表要旨集』,日本地理学会,2018

7. 池田彩乃・淡野寧彦「愛媛県鬼北町における座敷雛の発祥と地域的特色」『地理空間 13(2)』, 地理空間学会,2020
8. 与謝野晶子「姑と嫁に就いて (再び)」津村節子編『日本の名随筆 (別巻) 嫁姑』,35 頁,作品社,1994
9. 秋山ちえ子「姑」前掲 8,206-207 頁
10. 宇佐川 満編『嫁と姑』,医歯薬出版株式会社,1961 を参照されたい。
11. 田中 亘「西南日本における家族慣行」『日本の民俗学』第 90 号,1973 および福田アジオ・塚田学編『日本歴史民俗論集』吉川弘文館,1993 などを参照されたい。
12. 工藤 豪「「隠居制家族」に関する一考察—家族構造との関連で—」『家族研究年報 38』, 家族問題研究学会, 2013
13. 田中真砂子・大口勇次郎・奥山恭子編『縁組と女性』,早稲田大学出版,1994
14. 竹田 亘「韓国家族における嫁と姑」,前掲 13,80-81 頁
15. 岩上真珠「「家」婚入者の家族役割経歴-「嫁・姑関係」再考-」,前掲 13,212-226 頁
16. 小泉麻美「祭りと女性の役割—佐渡市岩首の鬼太鼓を中心—」『古事：天理大学考古学・民俗学研究室紀要 13』,天理大学,2009
17. 坂元一光, アナトラ・グリジャンティ「ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸活動：柳川さげもん調査予報」『九州大学大学院教育学研究紀要 13』,2011
18. 遠野商工会 (URL : <https://www.shokokai.com/tohno/>) 2022.03.02 アクセス
19. 遠野学叢書第 2 巻『遠野の郷土芸能』遠野文化研究センター,2015

A Case Study of the Transmission of Traditional Events — Collaboration on Mizukibina in Tono City —

ENDO Masako